

大通公園を望む窓辺から

地域力が垣間見えた時

常任理事 藤井 美穂

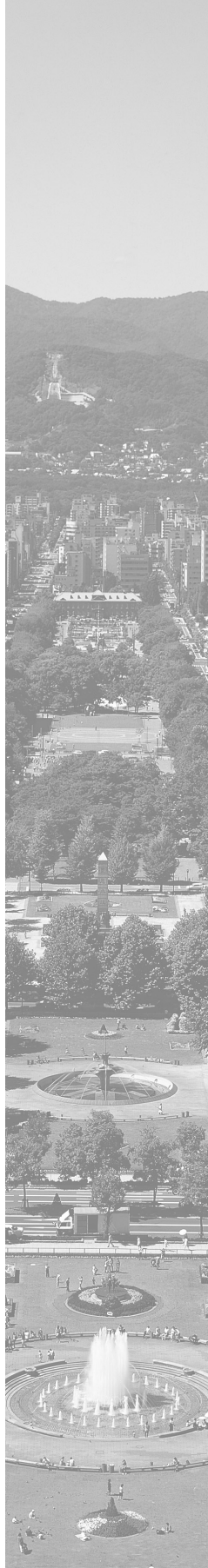
9月6日未明、震度7という大きな地震が北海道を襲いました。41人ももの大切な命を失い、住み慣れた故郷や家を失った方も多く、大きな災害でした。

全道が、電力供給がストップするブラックアウトという聞き慣れない被害に直面し、北海道電力をはじめ、行政、個人レベルにわたる危機管理意識があらためて問い直される機会になりました。

自然災害大国日本の国土は全世界のたった0.28%。この狭い国土に全世界で起こったマグニチュード6以上の地震の20.5%が集中し、被害金額の11.9%がわが国の金額であると報告されています（国土技術研究センター（JICE））。

今回、1日半という短い停電生活の中で、ひとの心遣いを感じたことがいくつもありました。わが家では91歳の母を在宅介護しています。毎日朝7時にはヘルパーさんが来てくれ、デイサービスへの送り迎え、夜8時まで母の食事やその他の世話をしてくださる生活がもう10年以上も続いています。この災害で、ヘルパーさんや介護サービスの方たちが、停電や交通網の麻痺で通常の仕事ができなくなりました。しかし、ご自身も被災して大変な中、母の様子を見に来てくれたり、普段あまり話したことのない近所の奥さんが安否を気遣い、訪ねて来てくれたりしました。

同じ町内には独居高齢者が何人もおり、心細い時間を過ごされたことでしょう。10年前に亡くなった父が災害時のためにまとめていたカセットボンベのコンロ、ラジオ、電池式のランタンを使いながら、災害時にも機能する地域包括ケアシステムを築く必要性を考えていました。メディアでは南海トラフの確率上昇の危機が報じられていますが、全く予想していなかった今回の北海道の地震が、全国誰もが遭遇するものであることを示し、被災の視点に立った高齢者ケアシステムが必須であろうと実感しました。



想定外

理事 稲葉 秀一

今年7月上旬、西日本を襲った平成30年7月豪雨、その時の報道で踊ったのは「数十年に一度」「これまで経験したことの無い」そして「想定外」という表現でした。同じような表現は実は過去に何度もあります。あの東日本大震災の時も、「想定外の震度」「100年に一度の津波」そして「想定外の原因事故」、国や東京電力は「想定外」という言葉で片づけようとしたことは、皆さんにとってもまだまだ記憶に新しいことだと思います。

そもそも「想定外」と言い切れるものだったのでしょうか。過去の事例を学び、詳細な調査を行い、科学的根拠に基づき検証し、普遍的な立場に基づいての想定づくりがなされているのでしょうか。過去の日本における歴史上の出来事を考えてみても、権力者の意向を汲んでの想定づくりがなされていた時代もあります。ここで今一度、あのハインリッヒの法則（1件の大きな事故・災害の裏には、29件の軽微な事故・災害、そして300件のヒヤリ・ハットがあるとされる。重大災害の防止のためには、ヒヤリ・ハットの段階で対処していくことが必要である）を思い起こしてみる必要があると思います。

料理人は、お客さんに出した料理のことでクレームが生じた時、「想定外」のことでと言うのでしょうか。私たち医師も、患者さんに予期せぬ臨床経過、事象が生じた時、患者さん・家族に「想定外」と説明するのでしょうか。「想定内」の出来事として捉え、責任を持ってありとあらゆる努力をするものです。

国は国民の命を守る責務があると思います。一方私たち医師も、一人一人の患者さんを通して国民の命を守っています。しかし、ひとたび「想定外」の事案が生じた時の対応には、大きな違いがあると言わざるを得ません。勝ち誇ったように「想定内」と言い、言い訳のように「想定外」と言う、責任逃れの言い訳の言葉が蔓延る危機感を感じています。